

VIVA! MUSICA Vol.2

～こどもたちに音楽の花束を～

曲目解説

長井 進之介

[1] 春畑セロリ：ある朝、かどをまがったら

ジャズのハーモニーやリズムの面白さを効果的に使い、高揚感や楽しい気持ちをわかりやすく表現した作品で大人気の作曲家、春畑セロリのこどものためのピアノ曲集《ひなげし通りのピム》の第1曲。妖精のピムが出かける中で出会う様々なものがほのぼのとした世界観で描かれる曲集の最初を飾る曲にふさわしく、期待感に溢れている。語り掛けるように優しい旋律が魅力的だ。

[2] 後藤ミカ：だれかいるの？

子供向けの作品や連弾曲などで高い評価を得る作曲家の後藤ミカ。この曲は『コンサート・ピース コレクション 夜風と花火』所収曲。ピティナ課題曲賞を受賞しており、後藤の「絵本のような日本らしい作品を」という想いから書かれた作品である。民謡を思わせる音階が印象的に響くのと同時に、どこか“肝試し”をしているかのような不安な雰囲気を作り出している。

[3] ラモー：リゴドン

ジャン＝フィリップ・ラモー（1683-1764）は作曲家であり、機能と声法と調性を体系的に理論化した最初の音楽理論家としても知られている。オルガニストとしても活躍し、優れた鍵盤楽器のための作品を数多く残した。「リゴドン」とは南フランスのプロヴァンス地方を起源にもつ民俗舞踊。ルイ 14 世の時代、非常に流行した。快活で力強いステップの舞曲である

[4] ペッツォルト（伝 J.S.バッハ）：メヌエット ト短調 BWV Anh.115

ヨハン・セバスティアン・バッハ（1685-1750）が2番目の妻、アンナ・マグダレーナのために編纂した《アンナ・マグダレーナ・バッハのためのクラヴィーア小曲集 第2巻》の中の1曲である。長らくバッハの作品として知られてきたが、実際はクリスティアン・ペッツォルト（1677-1733）が作曲したものである。下行音型を基礎とした、静かな哀しみに溢れた楽曲。

[5] ハイドン：ドイツ舞曲 ニ長調

ウィーン生まれの作曲家であるフランツ・ヨーゼフ・ハイドン（1732-1809）はハンガリーの貴族エステルハージ侯爵の宮廷に約30年仕え、オペラ、交響曲、器楽曲、宗教曲などあらゆるジャンルに多くの作品を残した。特に弦楽四重奏曲の形式を確立し、104曲もの作品を書いて交響曲のジャンルを発展させた功績は大きい。そんなハイドンにとって舞曲というジャンルは非常に重要な意味を持っており、あらゆるジャンルの中にもその要素を取り入れている。この曲は宮廷で貴族たちが優雅に踊っている情景が見

えてくるような軽やかなメヌエットである。

[6] フィンランド民謡：野いちご

日本でも「野いちご 赤い実だよ」という訳詞がつけられ、童謡《野いちご》として知られている。悲しげに語り掛ける旋律が奏でられ、後半からは右手と左手の拍節にズレが生じていく。

[7] グルリット：勇敢な兵士 Op.117-25

ドイツの作曲家であるコルネリウス・グルリット(1820-1901)は多くのジャンルに作品を残しているが、今日では子供向けのピアノ曲でその存在が知られている。《勇敢な兵士》は付点のリズムが力強い兵士の行進を示しているかのようであり、躍動感のある楽曲となっている。

[8] バスティン：夜のおろぎ

この曲の作者であるアメリカのジェーンとジェームス・バスティン夫妻は『バスティン・メソッド』とよばれる、ピアノの演奏技術と共に、様々な音楽のスタイルを体系的に学べるように開発し、まとめた存在である。《夜のおろぎ》はバスティンの『ピアノライブラリー ピアノソロ レベル 2』所収。前打音やスタッカートが多用され、さらに跳躍音型によって飛び跳ねるおろぎの動きが描き出されている。

[9] ショスタコーヴィチ：ワルツ Op.69-2

ソ連時代を代表する作曲家であるショスタコーヴィチが娘のために書いた《子供のノート》の第 2 曲。シンプルだが、跳躍音型や非和音が巧みに利用されることで、様々な色彩の変化が感じられ、ショスタコーヴィチの語法が活きた曲となっている。

[10] 三善晃：海のゆりかご

フランスと日本の音楽スタイルを巧みに融合して独自の語法を生み出し、あらゆるジャンルに傑作を残した三善晃(1933-2013)。《海のゆりかご》は、そんな彼が子供のために書いた曲集《海の日記帳》の第 1 曲。全体はゆったりとした雰囲気に入れられ、左右の手が掛け合う音型は、静かに波が寄せては返す様子を描き出していく。

[11] ローリー：小フーガ 第 4 番

アレック・ローリー(1892-1958)はイギリスの作曲家でありオルガニスト。主に教育用の作品を書いたが、ピアノ協奏曲など規模の大きな作品も残している。この作品は、堂々とした上行音階による主題で開始し、様々な転調を経て色鮮やかな楽想の変化を見せる。

[12] J.S.バッハ：ポロネーズ ト短調 BWV Anh.119

《アンナ・マクダレーナ・バッハの音楽帳 第 2 巻》に収められている 1 曲。「ポロネーズ」とはフランス語で「ポーランド風」を意味する、ポーランド起源の舞曲である。ヨーロッパに広まってから様々な性格のものが書かれているが、もともとは荘重な 3 拍子の舞曲であった。この作品ももともとのポロネーズの特徴で書かれている。

[13] マイカパル：子どものダンス

サムイル・モイセエーヴィチ・マイカパル（1867-1938）は、ウクライナ出身のユダヤ人ピアニスト・作曲家である。教育者としても優れており、ペテルブルク音楽院の教授を務めており、教育用のピアノ小品で特に名が知られている。《子どものダンス》は、生き生きとした順次進行による音階が様々なハーモニーの上で細かなニュアンスの変化を加えられながら奏でられていく。

[14] シューベルト：ワルツ ロ短調 D.145-6

フランツ・ペーター・シューベルト（1797-1828）は、あらゆるジャンルの作品を残しているが、特に約600曲もの作品を書いた歌曲やピアノ曲で特に知られている。ピアノ曲ではピアノ・ソナタや即興曲などが注目されるが、実は膨大な数の舞曲を残している。これらはシューベルトの生活に非常に密接なもので、常に彼は仲間たちとの集まりの中でこれらの舞曲をピアノで奏で、仲間たちはそれを伴奏に踊っていたのである。このワルツも踊るために書かれたものと思われ、短調ではあるが、必ず小節の頭に置かれた付点リズムによって軽やかさな雰囲気も醸し出されている。

[15] ラヨシュ：リズムの遊び (2+3)

パプ・ラヨシュ（1935-2019）はハンガリーの作曲家。ピアノのための作品を数多く残しており、ファンタジーに溢れたタイトルのもも多い。〈リズムの遊び (2+3)〉は、《22の小さなピアノ曲》の第19曲。5つ配置されたに8分音符を“2+3”拍子に分割して数える。快活な性格の楽曲で、舞曲の雰囲気も感じさせる。

[16] カバレフスキー：30の子供の小品 Op.27より No.6、No.13、No.14

ドミトリー・ボリソヴィチ・カバレフスキー（1904-1987）は子供向けに優れた作品を残した現代の作曲家の一人。同時代の作曲家たちに比べれば平明な和声を用いており、理解しやすい楽想で書かれている。詩や美術といった芸術的な才能にも恵まれていた彼の子供のための作品には、タイトルにふさわしいファンタジーに溢れた楽想が展開している。《子供のための30の小曲》の第6曲である〈かなしい物語〉は右手が奏でる美しい歌を丁寧に歌いながら、時折響く「ソ」の響きが作り出す悲しみの雰囲気を描き出すことが求められる。

第13曲の〈いたずら〉は反復される32分音符の音型が茶目っ気溢れる雰囲気を作り出している。また同時にこれを鮮やかに、そして軽やかに弾きこなすことが“いたずら”っぽさを出すために重要である。第14曲の〈スケルツォ〉は3回繰り返される主題が非常に印象的。スタッカートが“冗談”という意味を持つスケルツォの雰囲気を作り出している。

[17] 平吉毅州：四月のセレナーデ

平吉毅州（1936-1998）は独唱曲や合唱曲など声楽作品で多くの傑作を残した作曲家。一方で子供のためのピアノ曲も残しており、《子供のためのピアノ曲集「南の風」》もその一つ。まだ手の小さい子どもが、ペダルを使わなくても弾ける曲を、というコンセプトのもとに作曲されたもので、〈四月のセレナーデ〉はその第14曲。夜に愛しい人を想い歌う「セレナーデ」らしく、やさしい旋律がレガートに奏でられて

いく。また時折使用される半音階的な進行が揺れ動く心を描いているようである。

[18] 河井響：からくりどけい

ピアニストでもある若手作曲家の河井響による作品。スピード感あふれる楽曲で、冒頭の規則的な左手の音型は時計が時を刻んでいるさまを描いているようである。やがて次々に様々な楽想が展開していくが、これはそれまで時を刻むだけだった時計の扉が開き、中から舞台が現れて、様々な人形が踊り出す様を描いているという。

[19] ラモー：よろこび（ロンド）

ラモーが伝統的な舞曲や標題音楽をまとめて生み出した《クラヴサン曲集と運指法 第2番（第3組曲）》に収められた楽曲。〈よろこび〉は上下行音階によるシンプルな主題ながら、当時の美しい姿勢と手の形によって優雅に奏でられるクラヴサンの音色を想像しながら演奏することで美しい響きが生み出される楽曲である。

[20] ハチャトゥリアン：エチュード

アラム・ハチャトゥリアン（1903-1978）はグルジア（現ジョージア）の作曲家・指揮者。作品にはコーカサス地方の民俗音楽の要素が取り入れられており、力強いリズムや民謡を思わせる、どこか懐かしい気持ちにさせる旋律が特徴的である。〈エチュード〉は《子供のためのアルバム第1集 少年時代の画集》の第5曲で、連続して使用されるスタッカートが軽快さをつくり出している。一方でこのスタッカートをいかに均一に弾けるかが重要である。

[21] 小澤邦彦：La folletta

『コンサート・ピース コレクション 夜風と花火』所収の1曲。「La folletta(ラ・フォレッタ)」はフランス語で小悪魔あるいは妖精という意味。軽やかに飛び回り、人々を翻弄する想像上の存在を描き出すように、曲想がめまぐるしく変化していく。20世紀はじめの近代フランス音楽やイギリス音楽、そして1950年代後半～60年代のモダン・ジャズで使用されている音階や和声をベースにした音楽は、非常に色彩豊かである。

[22] 中村佐和子：だいすきな歌

《かぶとむしがきょうだいで》に収められている1曲。作曲者の中村佐和子はピアノ曲や合唱曲のジャンルで特に活躍している。右手と左手が交互に演奏する旋律は喜びに溢れる気持ちがかげあうかのようなものである。

[23] フェルディナント・バイエル：ピアノ教則本 第93番

フェルディナント・バイエル（1806-1863）は、ドイツの作曲家、ピアニスト。1850年頃に著した『ピアノ奏法入門書』（現在の『バイエルピアノ教本』）は、日本のピアノ教育において非常に重要なものとして長く愛用されている。その中の第93番は、16分音符や3連符のなめらかな演奏とアクセント、フレージングの適切な使用による表現豊かな演奏が求められる。

[24] スワビア民謡：かわいいアウグスティン

軽快なウィンナ・ワルツによる音楽、かわいらしいタイトルとは裏腹に、ウィーンで猛威をふるったペストによる犠牲を嘆く内容となっている。なお、この曲の旋律は日本におけるボーイスカウト・少年団活動の普及に貢献した中野忠八により「岩をぶっちわり」のタイトルで日本語の歌詞がつけられたものもある他、CM ソングとしても使われている。

[25] 池辺晋一郎：マッチぼうのマーチ

あらゆるジャンルにおいて傑作を書き、日本を代表する作曲家である池辺晋一郎。色彩豊かなハーモニーとリズムの多彩な使用によって印象深い音楽を作り上げている。《リズムの小箱》の中の1曲である〈マッチぼうのマーチ〉は、場面転換が多く、同じメロディがハーモニーの変化によって様々な表情や気分を見せる。

[26] ギロック：タランテラ

ウィリアム・ローソン・ギロック (1917-1993) はアメリカの作曲家。小さな田舎町、ラ・ラッセルで生まれ、なだらかな丘に囲まれた緑あふれる静かな環境の中、音楽好きの家庭で育った。ポピュラー・ミュージックを愛し、「美しい響きを心から愛し、楽しんだ」という日々は、ギロックの音楽のベースを作り上げていった。《こどものためのアルバム》に収められた〈タランテラ〉はスピード感あふれる楽曲である。なお、「タランテラ」は南イタリア起源の、8分の6拍子を取る急速で情熱的な舞曲を意味する。